

皆爲熊之別名、又或說爲牡熊、毛色如熊、白者、卽仙臺別封宇和島侯世子粧鎗鞘者是也、蓋世子所用以華渡熊毛乎、抑出於封內乎、余○雖波未嘗聞南海山中獲白熊、又有奧東松前獲白熊說、而傳聞曖昧、最不可信也、別錄曰、以十一月獲熊、今審本邦所獲、冬至之候、熊掘山中枯樹根、若巖下地、設窟穴、蟄伏、所謂熊館者是也、蟄時、噉榛皮、取瀉下、絕飲、啄據窟口、蹲踞如窺人狀者、數日、乃更入窟、熟寐、至春月而始覺、浪遊四方、然以亂山峭絕、行步艱、春初、冰雪稍泮、時多獲之、不特十一月也、時珍曰、蟄時不食、餓則舐掌、傳會甚矣、蓋本之於熊、踏有美味之稱、去窟數里、必別作一二處之窟、方其浪遊、彼此交棲宿、是以節候、或失其期、不能獲熊、亦認舊栖處、因索別窟、爲後圖、不出二三年、棲蟄故也、窟口徑僅一尺許、熊能屈伸其身、踊躍出入、華元化稱熊經戲、非虛語也、

〔北越雪譜 初編上〕熊捕

そもそも熊は和獸の王、猛くして義を知る、菓木の皮、虫のるるを食として、同類の獸を喰す、田圃を荒す、稀に荒は、食の盡たる時也、詩經には男子の祥とし、或は六雄將軍の名を得たるも、義獸なればなるべし、夏は食をもとむるの外、山蟻を掌中に捺著、冬の藏蟄にはこれを蹀て、飢を凌ぐ、牝牡同く穴に蟄らず、牝の子あるは子とおなじくこもる、其藏蟄する所は、大木の雪頰に倒れて朽たる洞、下なだれの事又は岩間土穴、かれが心に隨て居る處さだめがたし、雪中の熊は右のごとく他食を求ざるゆゑ、その膽の良功ある事、夏の膽に比ぶれば百倍也、我國にては、飴膽、琥珀膽、黑膽と唱へ、色をもつてこれをいふ、琥珀を上品とし、黑膽を下品とす、僞物は黑膽に多し、○中略

白熊

熊の黒は雪の白のごとく、天然の常なれども、天公機を轉じて、白熊を出せり、天保三年辰の春、我が住魚沼郡の内浦、佐宿の在大倉村の樵夫八海山に入りし時、いかにしてか、白き兒熊を虜り、世に珍として飼おきしに、香具師江戸にいふ見世ものこれを買求め、市場又は祭禮すべて人の群る